

Four Seasons 四季

関根信一

平谷 賢 (51歳 高校教師)	……	中島 聡
相庭弘毅 (52歳 「メゾン・ラ・セゾン」の大家)	……	関根信一
清水太一 (50歳 デパート勤務)	……	石関 準
田口茂雄 (52歳 不動産会社勤務)	……	岸本啓孝
二階堂渉 (41歳 小児科医・相場弘毅の甥)	……	井手麻渡
平谷 剛 (55歳 平谷賢の兄)	……	中島 聡
溝口裕也 (23歳 清水太一の同僚)	……	井手麻渡

相庭弘毅が経営するアパート「メゾン・ラ・セゾン」と彼が住んでいる家の間に
ある庭が主な舞台。

上手側が「メゾン・ラ・セゾン」、下手側は介護付きケアコミュニティ「ひまわり」。「ひまわり」が建っているのは相場弘毅の実家だった場所。「ひまわり」とこの庭の間には通り抜けのできない塀がある。

正面に大きな木が一本。客席の中央あたりにある気持ち。
舞台にはいくつかの椅子。場面に応じて位置を変える。

*

*

*

第一場 春

2025年4月平日の午後の庭。
舞台にはいくつかの椅子。

一脚は倒れている

相場弘毅がやってくる。

倒れている椅子を起こす。

椅子に座ってぼんやりと樹を見ている。

太一がやってくる。大きな荷物。

太一 ただいま。

弘毅 おかえり。

太一 ごめんなさいね、待ってた？ 新幹線、線路立ち入りとかで1時間遅れ。笹団子買ってきた。平谷くん、好きだったから、後でみんなで。

弘毅 ありがとう。

太一 火葬は無事に済んだの？

弘毅 うん、茂雄ちゃんと平谷くんのお兄さんと僕で。平谷くんの同僚の先生たちには遠慮してもらって。

太一 私もちゃんとお別れしたかったな。

弘毅 もう少し待ってもらえませんかって言ったんだけどね。

太一 で、お骨は？

弘毅 平谷くんのお兄さんが持ってた。

太一 ええ、ここに一度もどつてくるんじゃないの？

弘毅 早く帰んなきゃいけないんだって。

太一 ちょっとどういうことよ？ 実家とは絶縁状態だったんでしょ？ なんでそういうことになるわけ？

弘毅 学校から連絡行つたみたいで。こちらで葬儀はやりまして言ったんだけど、そういうわけにはいかないって、お兄さん。

太一 何よ、ずっと遠ざけてたくせに。

弘毅 しょうがないよ。血縁なんだから。

風が吹く。

太一 二人とも遅いわね。

弘毅 茂雄ちゃんは、物件の立ち会いが長引いているって、渉は担当してる子の容態が急が悪くなったって。二人とももうすぐ来るって、連絡あった。

太一 で、どこで話す？ 平谷くんの部屋？

太一、歩き出す。

弘毅 ここでよくない？ 今日であたたかいし。

太一 そうね。じゃあ、そうするか。ちょっと遅いけど、お花見の気分ね。（目の前にある樹を見て）この樹、桜じゃないけど。

弘毅 うん。

風が吹いて樹を揺らす。

太一 ここで話すのってひさしぶりじゃない？ 昔は、なんだかんだ言っただけでイベントしてた。

弘毅 バーベキュー、流しそうめん。

太一 食べてばかり。

弘毅 花火したよ。クリスマスもやった。

太一 なつかしいわね。

弘毅 それで、お母さん、なんだって？

太一 もう、全然だめ。家も土地も処分して東京に来ればいいって、いくら言ってもわからないのよ、親せき連中が。

弘毅 親せき？

太一 そうよ。もう勝手にしてって言って帰ってきたわ。

田口茂雄と二階堂渉がやってくる。

茂雄 ごめん、遅くなった。

弘毅 立ち会い終わったの？

茂雄 さんさん見て回って、他をあたりますって。

太一 あんたんとこの物件、古くさいのよ。

茂雄 リフォームはしてます。あんたもメンテナンスちゃんとした方がいいわよ。

太一 あら、ご心配なく、肌年齢まだ30代なんです。

弘毅 (渉に) もう、だいじょうぶなの？ 具合悪くなった子。

渉 とりあえず落ちついたんで。呼び出しがあるかもしれないけど。

弘毅 悪いね。わざわざ来てもらって。

渉 平谷さん、家族みたいなもんだから。そう言って出てきたんで。

太一 じゃ、始めましょうか。

なんとなく始まらない。

渉 警察はなんだって？

弘毅 事件性はないってことに。

渉 よかったね。

太一 当たり前でしょ？ なんでこんなに時間かかるわけ？

茂雄 自宅で亡くなるといういろいろ大変なんだよ。医者が看取ってないから。

弘毅 発見したときのこととかいろいろ聞かれた。

渉 なんて答えたの？

弘毅 学校春休みだから、ずっと部屋にいるのは知ってたの。でも、Amazonの荷物がいつまでもドアの前に置きっぱなしで。何日か出かけるときはいつもひと言言ってたから、どうしたのかなって。チャイム鳴らしたけど、返事がなくて。合鍵で入ったら、ベッドで寝てて。起きなよってゆすったんだけど起きなくて、首筋に手を当てたら冷たくて。心臓も止まってて。すぐに茂雄ちゃんに連絡して、救急車が来るまでずっと心臓マッサージしてた。検死の結果は急性心不全で、眠ってる間に亡くなったんでしょって。

問

渉 まあ、よかったよね。いろいろ無事に済んで。

太一 無事になんか済んでないわよ。疑われてたんでしょ私たち。あんた取り調べされたんでしょ。

弘毅 事情聴取。

太一 取り調べよ。なんで平谷くん殺さなきゃなんないんだっつうの。絶対、偏見持ってると思う、私たちがゲイだからって。

渉 というか、話したの？ このアパート「メゾン・ラ・セゾン」にはゲイばかりが住んでるんだって。

弘毅 話してない。だって、平谷くんが死んだこととは関係ないじゃない。

茂雄 でも、なんだか関係あるみたいな口ぶりだった。

太一 世間なんてそんなもんなのよ。いくらLGBTってことばが身近になったからって、そんなの上辺だけなのよ。ああ、腹が立つ！ 取り調べならカツ井くらい出しなさいよ。

弘毅 だから事情聴取だって。

太一 あの人のせいよ。平谷くんのお兄さん。感じ悪かったでしょ。会ったことないけど。弘毅 まあね。

太一 ほら、ごらんなさい。平谷くん、別れた奥さんに実はゲイなんだってカミングアウトしたら、もう子どもには会ってほしくないって言われて。クリスマスプレゼント返されて帰ってきたじゃない。それで平谷くん、どうせ知られちゃうだろうって、実家のお兄さんたちにもカミングアウトしたんでしょ。それがもって縁を切るって言われて。だから、あの人が話したのかも。

弘毅 考えすぎだって。

太一 だったら、こんなにさっさとお骨持って帰ったりする？

渉 お骨ないの？

太一 そうよ。お葬式こっちであげたっていくらくらいなのに。お別れ会だっけじゃない。というか、私、会ってもいないのよ、平谷くん。

弘毅 向こうにしてみたら、赤の他人に任せられないってことなんだと思うよ。

太一 どっちが赤の他人よ。

渉 とにかく、これからのこと考えようよ。

一同 うん。

間

渉 平谷さん、いくつだったの？

弘毅 五十一。僕と茂雄ちゃんのいっこ下。

太一 私のいっこ上。学年は一緒。初めてだわ。同じ年の友達が亡くなったの。なんだか身につまされるっていうか。

茂雄 次は自分かっていうか。

太一 ……。

茂雄 ごめん。で、平谷くんの部屋の片付けなんだけど、こういう場合、大家さんがしきっていいと思う。平谷くんのお兄さんもお任せしますって言ってたし。

太一 じゃあ、さっさとやっちゃいましょう。

渉 そうだね、せっかくみんな集まったんだから。

茂雄 人手は多い方がいいに決まってる。

渉・太一 うん。

間

太一 でも、すぐに見つかってよかったわよね。何日も見つからなかったらって考えると。

渉 一緒に住んでよかったってことだね。

弘毅 よくない。こうならなかったために、一緒に住んでたんじゃないの？

太一 じゃあ、どうすればよかったってこと？ 寝てる間に死んじゃったんだから、どうしよ

うもなかったじゃない。いろいろ考えちゃうのはわかるけど、考えたってしょうがない。良い方に考えましようよ。

茂雄 そんなに責任感することないと思う。

太一 あんたが自分を責める気持ちはわかるけど、しょうがないじゃない。

弘毅 そうじゃないの、実は僕、平谷くんプロポーズされて……

太一 どういうこと？

茂雄 何も聞いてないんですけど。

太一 ちよつとくわしく話しなさいよ。

弘毅 ええ……

太一 いいから！

弘毅 じゃあ。去年の今頃だったかな。平谷くんが僕の部屋に来て。

平谷賢が登場。

弘毅 平谷くん、何、相談って？

賢 実は……

弘毅 まあ、いいから座って。

弘毅、賢に椅子をすすめて二人は座る。

賢 同性パートナーシップ宣誓って知ってる？

弘毅 うん、知ってる。知り合い何人かやってるし。

賢 やらない？ 一緒に？

問

弘毅 何言ってるかわからない。平谷くんと僕？

賢 お願いします。

賢、頭を下げる。

弘毅 ちよつとやめてよ、ふざけるの。

賢 ふざけてるみたいに見えたらごめん。割と真剣なんで。

弘毅 割とつてなに？ 同性パートナーシップでしょ？ これってある意味プロポーズってこと？ そうなの？

賢 つまりはそういうことです。

弘毅 急にそんなこと言われても……。たしかに平谷くんはいい人だし、好きだけど。そんな困る。

賢 僕の気持ち、受け止めてほしい。

問

弘毅 ごめんなさい。なんていうか、今すぐには決められない。ていうか、友達から始めようっていうにはもうずっと前から友達だけど。ごめんね。

賢 ……。

弘毅 お互いいいトシだし、一人はさびしいって気持ちになるのはわかるけど。カップルになることばかりが人生の目的ってわけじゃないじゃない。パートナーがいなくても、いい友達がいたら、一人だって全然いいんじゃないかな？

賢 ……

弘毅 友達じゃだめかな？

賢 全然だめじゃない。これからもよろしく。

弘毅 こちらこそ。

賢 じゃあ！

賢、出て行く。

場面は元の庭に戻る。

弘毅 こんなかんじ。わかるでしょ？ 僕がいろいろ考えちゃうわけ。

太一 あんた自分に都合のいいように再現してない？

弘毅 してないって。だって、突然だよ。突然、プロポーズされたんだから。

渉 プロポーズっていえるのかな？

弘毅 プロポーズでしょ？ デリケートな問題だから、これまでみんなには話してなかったけど。

太一 びっくりしたわ。

弘毅 でしょ。

太一 平谷くんが、私以外にもプロポーズしてたなんて。

弘毅 ええ？

太一 私が平谷くんに告られたのは、去年の夏。梅雨が明けた頃だったかな。仕事の帰りに新宿でお茶したの。

賢がやってくる。

場面は新宿のカフェ。

太一 なんの話？ うちの社販で何かほしいものがあつたりする？ あ、お中元のオーダー？

賢 ちよつと相談したいことがあつて。

太一 まさか、恋の悩みのな？ いい人ができた？ ちよつと会わせなさいよ。大丈夫、悪いようにはしないから。

賢 太一、今、付き合ってる人とかいないよね？

太一 なんで否定形なわけ？

賢 あ、ごめん。いるの？

太一 いません。微妙な年頃なのよ。よく言うじゃない。「中途半端が一番よくない」って。だからなのねと思って、体重増やしたり、ダイエットしたりしたけど、全然だめで、中

途半端っていうのは、体型の話だけじゃなくて、年齢のことだったんだわって。
賢 50代は中途半端なトシじゃないんじゃないかな。
太一 わかってるの、わかってるけど、もう少し現実逃避させて。そういうわけで、今は、ちよつと恋愛は休んでるかんじ？
賢 じゃあ、いないんだ。よかった。
太一 何よ、失礼しちゃうわね。
賢 実は相談があつて。
太一 なーに？
賢 お願ひがあるんだけど。
太一 だからなに？
賢 同性パートナーシップ宣誓してくれないかな？
太一 私？
賢 うん。
太一 だれと？
賢 ぼくと。
太一 え、なんで？
賢 お願ひします！
太一 それってお願ひされてするもんじゃないでしょ。だって、つきあつてもいないのに。
賢 じゃあ、これからということだ。
太一 私たちいつもお互いのタイプの男の話とかしてたじゃない。平谷くんは、スポーツマンタイプの細マツチョ、私は男くさいガチムチ。全然違うでしょ私たち？
賢 それはそうなんだけど……
太一 夢をあきらめちゃだめだって。
賢 夢と現実の違いっていうか……
太一 残念な現実で悪かったわね。
賢 ああ、ごめん。
太一 別にいいんだけど、そういう話友達ノリでしちゃうと、もう無理っていうか、友達から恋人つていうののむずかしさつてそこなんだと思う。
賢 そうか……。そうだね。
太一 ごめんなさいね。元氣出して。ファイト！
賢 ありがとう。じゃあ。

賢、退場

渉 これって告られたっていうのかな？
太一 いうでしょ？ だから今までだまってたんじゃない。
弘毅 僕が断つたから太一に行ったってこと？
渉 時系列としてはそうだね。
太一 相庭さんでも私でもいいってどういうこと？ 誰でもいいってわけ。

渉 自分をおとしめるのはよくないよ。

太一 もう他人事だと思って。

渉 他人事じゃないんで。実は僕も平谷さんとその話したことあるんで。
一同 ええ？

渉 去年の三月、夜勤明けで帰ろうとしたら、平谷さんとばったり会って。平谷さん、うちがかかりつけだから。その日は、健康診断の結果を聞きにきたんだって言うってた。で、お昼一緒に食べようってことになって。

場面は、ファミレス。

賢と渉が向かい合って座る。

食事は終わったところ。

渉 平谷さん、デザートはどうします？ 僕。パフェいきますけど。

賢 僕はいいや。血糖値高くて、血圧も。

渉 健診の結果ですか？

賢 うん、薬飲むほどじゃないから食事に気をつければいいって。
渉 じゃあ、ぼくだけ。

渉、タブレットでオーダーする。

賢 涉くんは健康なの？ 医者だから当たり前か？

渉 医者の不養生っていいますからね、からだ壊してる人多いですけど、僕はいまのところは。でも、大台に乗ったんでいろいろ気にはしてるんですけど。

賢 大台って、40になったところでしょ。

渉 身体の変化は40代から始まるんですよ。じゅうぶん大台です。

賢 そうだよ。初めて会ったのはまだ学生だったんだもん。年取るはずだ。

渉 平谷さん、全然変わらないですよ。ゲイのトシのとらなさってなんででしょうね。ヒロちゃんもそうだし、太一さんも茂雄さんも。

賢 いつも見てるからだよ。久しぶりに会ったら、やっぱりトシとってたって思うよ。

渉 このあいだ、理彦と久しぶりに会ったんですよ。アメリカから帰ってきて。
賢 別れてずいぶん経つのに、つきあいあるんだ。

渉 びっくりしますよ。ガチムチのイカホモになってるんで。写真見ます？
賢 うん。

渉、スマホで写真を見せる。

渉 これです。

賢 これは、言われなきやわからない。

渉 彼氏に合わせて食べてたら、こうなったんだって言うてましたけど。

渉、スマホをしまう。

賢 渉くんは、なんで医者になったの？

賢 渉 家の跡継ぎって親に言われて。別にいやじゃなかったんで。

賢 渉 小児科医になったのは？

賢 渉 子どもかわいいいじゃないですか。変な意味じゃなくて。自分で子どもを産んで育てるってことはたぶんしないだろうから、だったら育てることをしようって。命を生み出せないけど、命を守ることをしようって。ゲイは生産性がないなんて言わせないっていうか。命を守るか……。

賢 渉 平谷さんだって、高校の先生じゃないですか。似たような動機なんじゃないですか？
賢 渉 というか、お子さんいるんですね。もうずいぶん大きくなってる。

賢 渉 大学入って、このあいだ成人したよ。

賢 渉 育てあげたってかんじ。

賢 渉 そんな全然だよ。養育費送ってたんだけどね。再婚したらそれももういいって。だから、もう他人みたいなもん。ずっと会ってないしね。ずっと一人だよ。

賢 渉 平谷さん、今、付き合ってる人とかいないんですか？

賢 渉 いない、いない。このトシになるとね。今さらってかんじなんだよ。

賢 渉 そんな諦めるの早くないですか？

賢 渉 諦めてるつもりはないんだけど。渉くんは？

賢 渉 いません。職場ではオープンにしてるんですけどね。理彦とつきあってたときに、同性パートナーシップがあったら、形だけでも家族になれて、ずっとつづいていられたんじゃないかって思ったりするんです。

賢 渉 同性パートナーシップか……

賢 渉 理彦、アメリカで今の相手と同性婚するんですよ。結婚式には元彼として来て欲しいって言われてるんです。

賢 渉 ……

賢 渉 あ、考えてます？ やっぱり誰かいるんですか？ そういう相手。

賢 渉 いない。いないよ。

賢 渉 あ、パフェこっちは？！

場面は解散。

太一 渉 あんたのせいだったのね。

太一 渉 やっぱりそう思います？

太一 渉 でも、わかるわ、その気持ち。子どもが大きくなって、ふとさびしくなる。自分は一人なんだって。ノンケ男性一般と同じ。しかもゲイ男性としては、頼るべきしがらみがない。だからパートナーシップ。ああ、うそでもいいから付き合っただけじゃよかったかな。

太一 渉 うそはよくないでしょ。

太一 渉 悪いことしちやったわね、私たち。

太一 渉 弘毅 うん。

茂雄がファイルから書類を一枚取り出して一同に見せる。

弘毅 なにそれ？（書類を見て）同性パートナーシップ宣誓？！

太一 やだ、あんたもなの？ ていうか、近場で間に合わせすぎ。

茂雄 捨てる神あれば拾う神あり。私が拾わせていただきました。

弘毅 これってほんとなの？

茂雄 もちろん。

弘毅 どうして？

茂雄 どうしてって、なんだか気の毒になっちゃって。

渉 愛情じゃなくて同情ってこと？

茂雄 そんなんじゃない。強いて言うなら、友情かな。

弘毅、太一、渉 ええ？

賢がやってくる。場面は茂雄の部屋。

賢 ほんとうにいいの？

茂雄 うん、いいよ。いつかやってみたいって思ってたし。相手はいないけど。

賢 相庭さんは？

茂雄 だいじょうぶ。付き合ってたのすっごい昔だから。

賢 じゃあ、申請の準備するよ。

茂雄 何か用意するものは？

賢 戸籍抄本と本人確認の書類。

茂雄 免許証でいいかな？

賢 だいじょうぶ。申請すると宣誓要件に該当するかどうかを聞かれるんだけど、僕が話しておいていいかな？

茂雄 いいけど、聞かれるの？ 二人の関係とか？ なんて言うつもり？

賢 二十年一緒に暮らしています。

茂雄 一緒って、部屋は別だよ。

賢 でも、一緒だよ。寝室別にしてるカップルみたいなもんだから。

茂雄 カップルなの？

賢 これからはね。あ、やっぱりだめかな。うそついてるみたいな気がする？ どう？

茂雄 うーん。（考えこんで）うそじゃないと思う。ていうか、これからどうなるかわから

いし。いちおう、確認なんだけど、「これから」付き合い始めていくかんじ？

賢 うん、できれば。でも、無理してもらわなくていいんで。

茂雄 わかった、無理はしない。

賢 じゃあ、よろしくお願いします。何かあったときには、お互いに一番に連絡がいくよ

な関係になれたらいいんで。

茂雄 それなら別にこんなことしなくてもいいんじゃないの？

賢 いろいろ調べただけど、今のところ、これしかないんだよ。あとは養子縁組をす

るか、後見人になるとかなんだけど、それも違う気がして。実家とは縁が切れてるから、

どうしようもなく一人なんだなって。一度結婚してるから、戸籍も新しく独立してて、今そこにいるのは僕一人なんだ。誰もいない。なんだか心細くてさ。もちろんこれは僕だけの一方的な問題じゃなくてお互いに。パートナーシップだから。

茂雄 うん、お互いに。

賢 手続きがいつになったか決まったら連絡するね。それじゃ、また！！

茂雄 じゃあ！！

賢、退場。

太一 あんたたち、行ったの、区役所？

茂雄 うん。去年のクリスマス。

太一 なんて黙ってたのよ。

茂雄 そのうちにちゃんと発表しようって話してて。

渉 なんか宣誓式みたいなのあるんでしょ？ だいじょうぶだったの？

茂雄 うん、うそついてるみたいない気持ちになるかと思っただけ、ならなかった。そのときかな、初めて平谷くんのこと好きだって思ったの。

弘毅 茂雄ちゃん、よく平谷くんの部屋に行ってるなあと思ってた。

太一 あんたたち、どういう間柄だったの？

茂雄 どういうって？

太一 だから、ほら、なんていうか……

渉 肉体関係。

太一 それ！ どうなの？

間

茂雄 それがさ、なかったんだよね。今さらそういう気持ちにならなくて。平谷くんもおんなじだって言った。

間

弘毅 なんでそんな急にしたかったんだらう同性パートナーシップ宣誓。

太一 あ！ もしかして、平谷くん、余命宣告されてたんじゃない。ガンのステージ4とか。

渉 去年の春の検診では何もなかったって。異常があったら、検死の結果でわかるはずだよ。

太一 だったら、平谷くん。なんで死んじゃったのよ。

風が吹いて樹を揺らす。

間。

弘毅 それじゃ、行こうか、平谷くんの部屋。

太一 そうね。

弘毅 茂雄ちゃん。

茂雄 うん。

一同、今度は立ち上がり歩き出す。

第二場 春2

平谷賢の部屋。

きれいに片付けられた物のない部屋。
椅子がいくつもあるだけ。

弘毅、太一、茂雄、渉がやってくる。

太一 まあ片付いてること。

茂雄 断捨離しようって一時期がんばってたから。荷物ずいぶん捨ててた。

弘毅 じゃあ、何から始める？

太一 こんなに片付いてるなら、このままでいいんじゃない？

弘毅 そうだね。急いでやることもないか。

渉 だめだよ。ちゃんと探さないと。

太一 探すってなに？

渉 お金とか通帳とか、保険の証書とか、そういうもの。

太一 (茂雄に) どこにあるの？

茂雄 知らない。

太一 あんたパートナーなんでしょ。いざというときの話とかしてないの？

渉 遺言書とかエンディングノートとか、二人で一緒に書いたりするもんなんじゃないの？

茂雄 ああ、パートナーシップ宣誓のあとで、遺言書とかそういうの作ろうかって話してたんだけど、遺言書ついていえば「犬神家の一族」だよねって盛り上がって……

太一 「ニセモノです、ニセモノです、その遺言状はニセモノです」

茂雄 「ひどいわ、私のことなんか何も書いてないじゃない」

弘毅 ふざけてる場合じゃないでしょ。

太一 ごめんなさい。

渉 どこかにあるかもしれない。探してみよう。

弘毅 うん。

渉、茂雄、部屋を出て行く。

太一 この部屋には何もなさそうね。

弘毅 いざというときの書類ってどこに置いてる？

太一 トイレの本棚。非常持ち出し袋と一緒に。でも、トイレに行くたび見ちゃうのが微妙なんだけど。相庭さんは？

弘毅 玄関の靴箱の上。

太一 とりあえずトイレと玄関、探してみる？

弘毅 そうだね。玄関には何もなかったと思うけど。

茂雄と渉がやってくる。

茂雄、エンディングノートらしき冊子と通帳と印鑑を持っている。

太一 何か見つかった？

茂雄、通帳と印鑑を見せる。

茂雄 通帳と印鑑。

渉 それとエンディングノート。

弘毅 どこにあったの？

渉 玄関の靴箱の中。

太一 隠したわね。盗難防止ってこと？

渉 一緒にしまつてちゃだめなのに。

太一 でも、見つかってよかったわよ。いくらあるの？

茂雄 いいの、勝手に見て？

太一 見るくらいいいでしょ。あんたパートナーなんだから。

茂雄 じゃあ……

茂雄、通帳を見る。固まる。

茂雄 ……。

太一 どうしたのよ？

太一、通帳を見る。固まる。

弘毅 二人とも何してんの？

弘毅、通帳を見る。固まる。

渉 どうしたの？

弘毅 (通帳を見せて) 一千万。

太一 それなりにあったわね。

茂雄 うん。

太一 で、これはどうなるわけ？

弘毅 どうなるって？

太一 誰のものになるの？

弘毅 茂雄ちゃん？

茂雄 同性パートナーシップ宣誓しても相続の対象にはならないと思う。

太一 遺言書があったら違うんじゃない？そこに何か書いてない？

茂雄 なにも。何も書いてないと思う。

茂雄、太一にエンディングノートを見せる。
太一、エンディングノートのページをめくって。

太一 もう何してんのよ？

弘毅 じゃあ、これは誰が相続するの？

茂雄 平谷くん、親御さんは亡くなってるから、お兄さん？あとは別れた奥さんと子ども？

渉 でも、みんな縁が切れてるんでしょ？

茂雄 そうだけど、そういうことになるんだと思う。

太一 いいのそれで？ 闘わないの？

茂雄 そんなことしたくない。ていうか、お金ほしくてパートナーシップ宣誓したわけじゃないから。

太一 何、かっこつけてんのよ。

玄関のチャイムが鳴る。

茂雄 誰だろ？

弘毅 クロネコさんかな？（奥に向かって）ちょっと手が離せないんで、ドアの前に荷物置いておいてください。

玄関のチャイムが鳴る。

弘毅 ちょっと見てくる。

弘毅、出て行くこうとする。

平谷賢の兄の剛が入ってくる。大きなバッグを抱えている。

剛 鍵開いてたんで……

太一 だれ？

弘毅 平谷くんのお兄さん。

剛 突然おじゃましてすみません。

弘毅 もうお帰りになったんだと思ってました。

剛 どんなどころに住んだのか、一度、見ておこうと思ひまして。

弘毅 こんなところですか。

剛 みなさんは？

弘毅 平谷さんの友人です。

太一 清水です。

渉 二階堂です。

剛 みなさん、こちらに？

弘毅 ええ。あ、この人（渉）は違うんですけど。

剛　そうですか。賢がいろいろお世話になりました。

茂雄　いえ、こちらこそ……

剛　ここ賢の部屋ですよ。みなさん、何されてたんですか？

弘毅　部屋の片付けというか、遺品の整理というか……。

太一　あの、それもしかして、お骨ですか？

剛　ええ、そうです。

剛、バッグから白い風呂敷に包まれた骨箱を取り出して椅子の上に置く。

弘毅　お線香もってくる。

剛　すぐ失礼するんで。お会いできてよかった。いろいろかかっていたことがありまして。

弘毅　なんででしょう？

剛　賢の遺産というか、残されたものがあるかどうか確認できたらと。まあ、大したものはないでしょうけど。（通帳とエンディングノートを見て）それは？

弘毅　賢さんのエンディングノートです。何も書いてないんですけど。

剛、エンディングノートを見ている。

弘毅　この通帳、お持ち下さい。口座凍結されちゃうと僕たち何もできないんで。

剛、通帳を見て

剛　（おどろいて）こんなに……

茂雄　養育費送らなくなってるから、ずっと貯めてたんじゃないですか？

弘毅　別れた奥さんと息子さんは？

剛　ようやく連絡ついたんですけど、そっけないもんですよ。葬儀も一切まかせますって。遺産も相続放棄するって言ってました。この話をしたら、気が変わるかもしれませんけどね。

問

茂雄　あの、葬儀のことなんですけど、どんなかんじですか？

剛　親族だけでうちうちに済ませようと思っっています。

茂雄　あの、僕、うかがってもいいですか？

剛　ああ、どうぞお気遣いなく。全部こちらでやりますんで。

茂雄　うかがいたいんです。名古屋ですよ？

剛　名古屋からけっこうあるんですよ。わざわざ来ていただかなくても。

茂雄　わざわざ行きたいんです。

弘毅　あの、僕も。

太一　私も。

剛　（ため息）困りましたね。

茂雄　なんですか？　友人としてうかがうのがなんで困るんですか？

剛　……。

茂雄　賢さん、田舎のお墓には入りたくない、散骨してほしいって言っていました。

剛　それはお断りしたはずです。

茂雄　だからせめてお葬式には参列したいんです。

間

太一　（茂雄に）ちよつと。あんた、出しなさいよ。こういうときのためのあれでしょ？　ほ

らあれ！

茂雄　……。

太一　もう！　この人、賢さんのパートナーなんです。

茂雄、宣誓書を出す。

剛　（見て）世田谷区同性パートナーシップ宣誓？

太一　この人には参列する権利があるんじゃないですか？　喪主になったっていいはず。

剛　これ本物ですか？

太一　は？　決まってるじゃないですか？

剛　（茂雄に）あなたには先日もお会いしました。なんであのとき言わなかったんです？

太一　そうよ、なんで言わなかったのよ？　一番大事なことでしょ！

茂雄　それは……

剛　よく知りませんが、これ法的な拘束力はないんですよ。もし本物だとしても。こんなものを持ち出されても困ります。葬儀への参列はご遠慮ください。

間

茂雄　こういうことになるんじゃないかと思ってた。言っても否定されるんじゃないかって。

だから言わなかったんです。

剛　……。

茂雄　言わなくても何も変わらない。相続の権利が法的に認められてるわけじゃないし。ただの紙切れだし、亡くなったら、解消してしまうものだし。だったらなかったことにしちゃってもいいんじゃないかなって。これは本物だけど。知らせなくてもいい人には黙ってていいんじゃないかって思ったんです。葬儀への参列は遠慮させていただきます。

間

剛　すみませんね。田舎なんでいろいろうるさいですよ。では、これで失礼します。あ、

そうだ。これ（通帳）はいただいていきますが、他に大きな借財があったりはしないでしょうか？

弘毅　ないと思います。家賃も月々きちんといただいていたし、ローンがあったら、これだけの額になってないでしょう。

剛 そうですか。実は、私も相続放棄しようと思っていたんですが、そうするとこの貯金が宙に浮いてしまいますね。

茂雄 息子さんに話してみてもらえますか？ それが一番いいと思うんで。

剛 やってみましょう。では……

剛、骨箱をバッグに入れようとすると、太一が骨箱を抱きかかえる。

剛 なんですか？

弘毅 太一、やめて。

太一 散骨する。私が散骨する！ 調べたことある。許可はいらなんでしょう？ 撒けばいいんでしょ？

剛 そんな乱暴な。

太一 田舎のお墓に入れちゃう方が乱暴よ！

渉 でも、そのままは撒けないんだよ。散骨するなら火葬場で粉にしてもらわないと。

太一 じゃあ、お葬式に行く。みんなで。

茂雄 いいから、返して。

太一 よくない。お葬式を遠くから見守るけなげな愛人のつもり。悪いけど似合わないから。わたしたちは正々堂々と平谷くんを見送る。平谷くんのために。

間

太一、骨箱を茂雄に渡す。

茂雄、骨箱を剛に渡す。

茂雄 葬儀にはうかがわせていただきます。みんなで。

剛 ……わかりました。ただ、その同性パートナーシップのことは言わないでいてもらえますか？ それでいいなら？

茂雄 ……わかりました。

太一 ちよつと……

茂雄 葬儀の日時が決まったら連絡ください。

剛 わかりました。

剛、骨箱をバッグにしまって。

剛 では、失礼します。

剛、出て行く。

茂雄 じゃあ、行くか、みんなで。

弘毅 涉どうする？

太一 行きましようよ。東京では友達がいっぱいいいて、幸せだったって、思わせたいじゃない。僕はいいかな。もうお別れはすんだみたいな気持ちになったし、こっちでお別れ会する

んでしょ。僕はそれでいいんで。

太一 そう？　じゃあ、三人で。

弘毅 亡くなったってことを知らせなきゃね。どうしよう？

茂雄 Xやってた。

渉 平谷さんのアカウントにログインできる？

茂雄 できる。スマホまだ生きてるから。

太一 やってみて。

茂雄、賢のスマホを開く。Xにログインする。

茂雄 あ、できた。

弘毅 書き込みして。

茂雄 ぼく？

太一 パートナーでしょ。ほれ！

茂雄、入力する。

茂雄 まさるさんが亡くなりました。

弘毅・太一・渉 うん。

茂雄 お別れの会を後日おこなう予定でいます。

弘毅・太一・渉 うん。

茂雄 まさるさんの知り合いのみなさんにお知らせください。

弘毅・太一・渉 うん。

茂雄 友人一同。

太一 友人一同？

茂雄 友人一同。送信。

茂雄、ツイートする。

見守る一同。

第三場 夏 2025年と2022年

庭。

7月初旬。

蝉が鳴いている。

太一が日傘をさしてやってくる。

正面にある樹に近づき、日傘をとじると、根本に向かって手を合わせる。

茂雄がやってくる。

茂雄 何してんの？

その声におどろいた蟬が飛んでいった。太一におしっこをひっかけて。

太一 (ハンカチで蟬のおしっこを拭きながら) やだ、もう……、あんたのせいだからね。

茂雄 久しぶりに聞いたわ蟬の声。もう絶滅してるんじゃないかと思ってた。

太一 この樹に集まってくるのよね。

茂雄 なに手合わせてたの？

太一 ここにいろんなもの埋めたなと思って。うちのアロワナとか相庭さんとかこの猫とか。タイムカプセル埋めようかって話もしたじゃない。みんなでフリマに行った帰り、売れなかったもの埋めちやおうって。

茂雄 でも、埋めなかった。

太一 埋めなかったけど、何十年か経ったらみんなで開けてみたりするのかなって誰かが言うて。その時私、でも、誰かがいなくなったりするのよって言ったじゃない。ほんとにそうなっちゃったなって。笑って話したわね、私たち。

茂雄 うん、笑ってた。

弘毅がやってくる

弘毅 ごめん、遅くなった。

太一 遅いわよ、涉まだ来てないけど。

弘毅 レンタカー屋でもめてるんだって。頼んでた車がないみたいで。

太一 またなの？

茂雄 時間かかるのかな、遅れたくないんだけど。

弘毅 こっち向かってるってLINEあった。それでね、今、電話があつて。

太一 涉？

弘毅 そうじゃなくて、平谷くんのお兄さん。これから来るって。

茂雄、太一 ええ？

剛がやってくる。

剛 すみません。近くまで来たので。

弘毅 電話でもお伝えしたんですけど、これから出かけるところなんですよ。私たち。

剛 田口さんもですか？

茂雄 そうですけど。何かあったんですか？

剛 ええ、まあ……

蝉がまた鳴き出す。

弘毅 ここじゃなんなんで、部屋で話しませんか？

弘毅と茂雄、歩き出す。

剛 ああ、すぐ済むんで。ここでけっこうです。田口さんにちよつとうかがえればいので。茂雄 なんてしよう？

剛 いやあ、ちよつと調べさせてもらったんですが、賢、保険に入っていたようで。その受け取り人が誰なのかを確認したいのですが。

茂雄 保険ですか？

剛 生命保険です。別に疑ってるわけじゃないんですが、一応と思ひまして。4年前から調べられるようになったんですよ。ただ、誰が受け取り人かということはわからないんで、心あたりがおありかと思ひまして。

茂雄 それ、僕です。

蝉が鳴き止む。

茂雄 隠してたわけじゃないんです。賢さんの部屋を探したら証書が見つかって。僕も知らなかったんですよ。勝手に受け取り人を変更してみたんで、息子さんから僕に。パートナーシップ宣誓のときに用意した書類でOKになったみたいなんです。

剛 つかぬことをお聞きしますが、保険金はいくらですか？

茂雄 一千万です。

弘毅 太一 一千万！？

剛 受け取られたんですね？

茂雄 いえ、まだ手続きしてないんです。

剛 どうして？

茂雄 三年は猶予があるみたいなんです。受け取れることは受け取れるみたいなんですけど。なんとなく。

剛 なんとなくって、大金じゃないですか。いいんですか？

茂雄 ええ、今のところは。

問

弘毅 相続の手続きは終わったんですか？

剛 ええ、なんとか。

弘毅 貯金は奥さんと息子さんに？

剛 相続放棄の手続きをしたそうです。

茂雄 太一、弘毅 ええ？

剛 相続放棄の期限の三ヶ月はもう過ぎましたからね。これで確定です。どうして？

剛 さあ、なんででしょうね？ これだけの遺産があるってちゃんと伝えたんですが。いらないうって。これから先、どんな借金が出てくるかわからないからって。

弘毅 それはないってお伝えしましたよね。

剛 信用できないって言うてましたよ。

茂雄 じゃあ、相続は？

剛 私のところに全部。私は相続放棄しなかったの。私もまだ何もしてないんですよ。手が付けられない気持ち、わかります。いや、保険のことがわかってよかったです。

渉がやってくる。

渉 ごめん、遅くなった。(剛に) あ、どうも。

剛 どうも。

渉 どうしたんですか？

剛 私はこれで。お邪魔しました。

弘毅 いえ、おかまいもありませんで。

渉 じゃあ、行こうか。高速使えば間に合うから。

太一 もう、ゆっくりドライブできるかと思ったのに。

渉 それは帰りでもいいじゃない。

太一 そうね。

剛 どちらへお出かけですか？

弘毅 あ、葉山です。

剛 葉山、湘南ですね。早い夏休みですか。

茂雄 賢さんのエア散骨しようって。

剛 エア散骨？

茂雄 気持ちだけでもと思って。うちの不動産屋がお世話になってるオーナーさんがクルーザー持ってるんで、それに乗せてもらうんですよ。

弘毅 ただ海見て、クルーザーに乗るだけなんですけどね。

太一 だからエア散骨。

剛 はあ……。

茂雄 三年前の夏、みんなで行ったんですよ。葉山に。遊びついでに、もしも誰かが死んで、散骨することになったら、どのへんがいいかなって。

剛 三年前ですか？

弘毅 ええ。ぼくらと賢さんと5人で。

場面は三年前、2022年の夏。

一同、椅子をならべかえて、車中。

剛は賢として、車に乗り込む。

運転は渉、助手席には弘毅がいる。

弘毅 平谷くん、行くよ！

茂雄 ねえ、それ持ってくつもり？ 日傘。

太一 当然でしょ。もう梅雨明けしたのよ。日焼けして後悔するよりはいいでしょ。

茂雄 避暑地でシヨップングじゃないんだから。湘南でしょ。海水浴場でしょ。

太一 私、海入らないから。ていうか、あんた入るの？

茂雄 ちよっとだけ。水着、新しいの買ったから。

太一 いいトシしてやめて。今日は遊びに行くんじゃないんだからね。

茂雄 わかっている。でも、久しぶりじゃない。みんなで出かけるの。

渉 晴れてよかったですね。道混むかもしれない。

太一 もう早く行きましょう。何してんの平谷くん。

平谷、やってくる。

一同、乗り込む。

発進する。

太一 もっと大きな車借りなさいよ。後部座席に3人は無理。前はもっと大きな車だったでしよ。

渉 同じです。みんなが少しずつ大きくなってるとお思いますよ。

茂雄 たしかに。

太一 私は20歳の体重。キープしています。

渉 体重は同じでも体積が変わったんじゃないですか。

茂雄 たしかに。

渉 長者ヶ崎あたりから、海岸沿いを見ていきますか？

太一 そうして。

渉 じゃあ、ルートを変更して、横横から行きますね。

弘毅 了解！

しばらくドライブ。

太一 この道、前にも通ったんじゃない？ 逗子マリーナのユーミンのライブに行ったとき。

渉 いつですか？

茂雄 2004年、最後の逗子マリーナ。

弘毅 なつかしいね。

太一 アンコールの「埠頭を渡る風」。ドライブするたび思い出す。緩いカーブでたおれてみたりするのよ。

車が大きくカーブして、みんな横にゆれる。

元に戻って。

太一 あまりときめかないわね。

弘毅 悪かったね。

茂雄 危険を感じるだけだから、ちゃんと運転して。

賢 ねえねえ、葉山の一色海岸にカラフルカフェっていうのがあるんだって。行ってみたい？

弘毅 カラフルカフェ？

渉 LGBTQの団体がやってる海の家です。僕行ったことありますよ。

太一 やだ、そういうノリなの？ 活動家っていうか。

渉 普通のビーチハウスですよ。ゲイだったこと隠さなくていいっていうか、みんなオープンにしてるんで。

茂雄 へえ、ちよつと行ってみようか？

弘毅 うん。

車を停めて、みんな降りる。

弘毅 わあ、海！

賢 きれいだな。

茂雄 砂浜も。海水浴場にしては。

太一 (茂雄に) どこ見てんの。いい男探しに来てるんじゃないからね。

茂雄 どうしても目がいつっちゃうよね。

賢 散骨の場所を見つけに来たのに、男に目が行くって、なんだかすごいね。

弘毅 煩惱からは逃れられないってこと。

太一 否定できません。

渉、砂浜を見ていたが、何かを拾い上げる。

渉 これ！

弘毅 なに？

一同、駆け寄ってみると、それはシーグラスのかけら。

太一 シーグラス？

渉 うん。いっぱい落ちてる。

渉、拾ったシーグラスを海に向かって投げる。

太一 ちよつと何すんのよ。

渉 え？

太一 せつかく何年もかけて浜辺にたどりついたのに。気の毒でしょ。

渉 またすぐもどってくるよ。そうやって、だんだん角が取れてすべすべになるんだから。

太一 そういうもんなの？ 私、拾っていこう。

賢 僕も。

渉 拾って家に持って帰られる方が気の毒じゃないんですか？

太一 いいの、いいの。

みんな、シーグラスを拾い集める。

弘毅 そろそろ行かない、カラフルカフェ？

太一 そうね。
茂雄 うん。

茂雄、太一、賢、サングラスをかける。

弘毅 何してんの？

太一 気合い入れないと行けない気分なの。

茂雄 じゃあ、行こうぜ。

太一、賢 おう。

弘毅 野郎ぶる必要もないよね。

太一 涉、先に歩いて。

涉 なんですか？

太一 いいから。

涉 じゃあ、行きますよ。

涉を先頭に、太一と茂雄、歩いて行く。
賢、立ち止まり、サングラスを外して、海を見ている。

弘毅 (賢に) どうしたの、平谷くん？

賢 この海に散骨されたら、海に向こうからこちらを見ることになるんだね。

弘毅 ああ、たしかに。いい眺めかも。

賢 退屈しないだろうな。

弘毅 行くよ。

賢 うん。

弘毅、先に行った面々を追って退場。
賢が残る。

場面は2025年にもどる。

退場した3人もどってくる。

太一は、手にガラスの瓶に入ったシーグラスを持っている。

太一 これがそのとき拾ったシーグラス。

茂雄 賢さんの部屋にずっとあったんで、今日はこれを撒いてこようかなって。

剛 そうですか。

弘毅 (剛に) よかったら、一緒に行きませんか？

涉 車、5人乗れると思いますよ。

太一 ちよつときついけど。

剛 仕事があるので、今日はこれで。

弘毅 そうですか。じゃあ、僕たち出かけますけど、平谷くんの部屋、鍵開いてるんで、よかったですか。

剛 まだそのままに？

弘毅 ええ、いつでも入れるようにしてあるんですよ。春にお別れ会をここでやって、形見分けして部屋も片付けるつもりだったんですけど、なかなか集まれなかったんで、そのうちにこのままでいいんじゃないかって。

剛 いろいろとすみません。

弘毅 そんな、全然、僕たちが勝手にやってるんで。それじゃ。

剛 それでは。行ってらっしゃい。

一同、出かけて行く。

蝉が鳴き出す。

剛、しばらくその場に立っている。

第四場 秋 転勤とカミングアウト

秋の庭

茂雄、太一、弘毅がエンディングノートを手を集まっている。
各自、自分のノートを見ながら。

弘毅 じゃあ、次、緊急連絡先。誰にする？

太一 相庭さん。

茂雄 弘毅。

弘毅 ねえ、一人ってよくなくない。何があるかわからないし。

茂雄 じゃあ、二人。ていうかお互いに。

弘毅、太一 うん。

弘毅 次、延命措置の是非は？

太一、茂雄 しなくていい。

弘毅 いいの？

太一 いい。何かあったらそれまでよ。何もしないでいいから。

茂雄 これって、人工呼吸をやめるかどうかっていう判断もするってことだね。

弘毅 平谷くん、救急車が来て、隊員の人が救命措置いろいろしてくれたけど、止めてもらっていいですって決められなくてつらかった。

太一 そうやって悩まなくていいように、先に決めておくんですよ。

弘毅 そうだった。じゃあ、次。介護は誰にしてほしいか？

太一 誰にもしてほしくないわ。

茂雄 そういうわけにもいかないでしょ。

太一 じゃあ、すぐに施設に入れて。介護されるなら他人がいい。

茂雄 弘毅、介護士なんだから、頼んじゃえば？

太一 絶対無理。仕事で割り切ってくれる人じゃないとわがまま言えない。ていうか、身内が介護するのが当たり前っていうのほんとによくないと思う。

弘毅 僕、割り切るよ。

太一 結構です。もういいんじゃない？ 後は各自でやりましょう。

弘毅 全部やっちゃおうよ。

太一 これ気が滅入るのよ。

茂雄 そうやって放っておくとあとあと面倒だから、三人でやるってことにしたんじゃない。言い出したのあんたよ。

太一 今日はここまで。

弘毅 じゃあ、走ろうか？

茂雄 うん。

弘毅、立ち上がる。

太一 私、今日はパス。

弘毅 また？ 行こうよ。ほれ。

太一 三人で走るのやめない？

弘毅 一人じゃ絶対にやらないから一緒にやるってことにしたんじゃない。

茂雄 適度な運動は大事だよ。

太一 適度じゃないわよ。過剰よ。

弘毅 じゃあ、歩くだけでもいいから。

太一 (弘毅に) あんた医者に言われたんでしょ、走る前に10キロ痩せなさいって、早く10キロ痩せなさいよ。話はそれから。

弘毅 そんなのいつになるかわからないじゃない。

茂雄 痩せる気あるの？

弘毅 太一がデパ地下の惣菜いつも買ってくるから。

太一 一人分の自炊は大変だから、交替で三人分用意することにしたんでしょ？

茂雄 目的忘れてないよね。食事に気をつけて健康管理するんだよね。

太一 遅くなる日だってあるじゃない。

弘毅 だからって揚げ物ばかり買ってくることないでしょうよ。

太一 食べなきゃいいでしょ？

弘毅 消費期限が今日中だったら、遅い時間でも食べちゃうじゃない。

太一 はい、じゃあ、これから気をつけます。

太一、行ってしまふ。

弘毅 ちょっと！

茂雄 しょうがないよ。じゃ、二人で行くか。

二人、走り出すが、すぐに歩きに変わる。

二人、ほとんど立ち止まる。

茂雄 なかなかうまくいかないね。

弘毅 なんだかさ、昔はもつと楽しくやれてたよね。

茂雄 何？

弘毅 なんていうか、こういうこと。一緒にご飯食べたり、走ったりとか。

茂雄 年取ったってことじゃない。

弘毅 そうかな。

茂雄 そうだよ、じゃ。

茂雄、行ってしまう。

弘毅 ちょっと待ってよ。みんなと一緒に年取っていくんだよね。

弘毅退場。

場面は変わって、新宿のカフェ。

太一と茂雄が話している。

茂雄 ええ？ 転勤ってどこに？

太一 新潟店。実家から通えるし、若干、昇進もするから、思いきって行っちゃおうかなって。

茂雄 お母さんの介護？

太一 まあね。遠くから何言ってもだめだから、実家にもどって、なんとか施設に入りたいと思うんだよね。

茂雄 実はさ、転勤の話、うちにもあって。

太一 金井不動産？

茂雄 今度スターツに吸収されて、あそこ本社千葉じゃない。本社勤務になりそう。

太一 通えないの？

茂雄 世田谷から千葉けっこうあるし。でも、太一が出てくんなら、考えようかな？ 弘毅一

太一 急に一人っていうのもね。

茂雄 うん。

太一 新しい入居者の心当たりないでもないんだけど。

茂雄 誰？

太一 うちの新人、この4月に新卒で入った。

茂雄 ゲイなの？

太一 うん。

溝口裕也が登場。

場面は太一の職場の給湯室。

太一 ああ、溝口くん、来週のハラスメント研修、どうなった？

裕也 ああ、講師の先生と連絡とれました。引き受けてくれるそうです。

太一 よかった。忙しいのにありがたいわ。何してたの？

裕也 湯飲み洗ってました。みんなの分。

太一 だめだって、自分の分は自分で片付けるって決めたんだから。

裕也 でも、流しに置いてあるんで。

太一 ほっといていいから。

裕也 これからはそうします。

太一、周囲を気にして話し出す。

太一 溝口くん、今ちよつといいかな？

裕也 なんですか？

太一 私、カミングアウトしようと思って。

裕也 何をですか？

太一 何をもって、自分がゲイだったことに決まってるでしょ。

裕也 ああ、元々はそういう意味ですもんね。

太一 元々じゃなくて、ずっとそうなの。溝口くん、入社して最初の挨拶で、さらっと自分はゲイだって言ったじゃない。私、びっくりして。

裕也 すみません。

太一 いいのいいの。時代は変わったんだなあって、しみじみしちゃって。

裕也 最初の面接のときから言ってたんですけど、みなさん知らなかったみたいで。

太一 個人情報だからね。そのあたりはちゃんとしているのよ、うち。でも、そうすると何も話せなくて。新人のあなたに相談するのもなんなんだけど。

裕也 あ、それなんですけど。言っ方がいいのかな？

太一 いいから言いなさい。何なの？

裕也 みんな知ってると思います、清水さんのこと。

太一 私、話してないのに？！

裕也 入社するとき言われたんです。誰とは言えないけれど、ゲイの社員はもういるからって。

太一 誰？

裕也 誰とは言えませんが、横山部長です。

太一 知ってたんだ。え、みんなも？

裕也 はい。だから、あえてしなくてもいいじゃないんですか？

太一 じゃあ、私のこれまでの苦労はなんなわけ？

裕也 みんなが知ってるってことを清水さんが知ってるんだったらそれでいいんじゃないですか？

太一 そうかな？

裕也 そうですよ。じゃあ、僕、売り場にもどります。

太一 あ、行ってらっしゃい。

裕也、退場。

場面は元のカフェ。茂雄が戻ってくる。

太一 どう？

茂雄 おどろいたわ。

太一 ねえ、すっかりしてるのよ。

茂雄 そうじゃなくて、あんたが職場でカミングアウトしてないんだってことに。

太一 そんなことより、どう？

茂雄 いいんじゃないかな？ ていうか、話はしてみたの？

太一 実家が埼玉の奥の方で無理矢理通ってるんだけど、一人ぐらししたいって言ってるの。うちのこと話したらおもしろそうって。

茂雄 いいじゃん。いいじゃん。若い子でメゾンラゼゾンも若返る。

太一 世代交代ね。

数日後

賢の部屋。

茂雄、太一、弘毅。

向かい合って座っている。

茂雄 そういうわけで、私たち出ていくことになりました。しばらくの間、弘毅ひとりになっちゃうけど……

太一 いいかな？

弘毅 なんで僕に聞くの？

茂雄 いちおう、大家さんだし。

弘毅 大家さんは出ていくって言われたら、そうですか？ 言うしかないじゃない。

太一 じゃあ、友達として相談。どう？

弘毅 そんないいに決まってる。どうぞどうぞ。太一はお母さんの介護、茂雄ちゃんは本社勤務、がんばって。

太一 ありがとう。それでね、新しい入居者なんだけど、心当たりがあって……

弘毅 あ、そういうのいいから。

太一 いいからって何？

弘毅 新しい人、来てもらわなくていいから。

茂雄 どうして？

弘毅 もうやめようかと思つて。メゾンラゼゾン。

茂雄と太一、顔を見あわせる。

茂雄 どうして？ いいじゃない、ゲイばかりが住んでるアパート。

弘毅 ほんとにそう思ってる？

太一 思ってるわよ。

弘毅 でも、出ていくんでしょ。

太一 だから、それは……

弘毅 太一だって、めんどくさいと思ってるんでしょ。ゲイばかりが住んでるんなら、男連

れ込むのに気兼ねしなくていいわって、そう思ってたのに、全然違うって。

太一 昔の話でしょ、今はそんなこと思っていない。

弘毅 でも、出て行くんでしょ

太一 それが理由じゃないから。

弘毅 またまた……。このあたりの出会い系サイトでは顔が売れちゃって、場所を変えて新しい出会いを求めてたりする？ 年齢サブ読むのも限界になったから、新しい場所ですりセツトしようと思ってる。

太一 そんなことしません。

弘毅 していいんだよ。すればいいじゃない。

太一 しません。

茂雄 弘毅、言い過ぎ。

弘毅 茂雄ちゃんもさ、平谷君の保険金受け取って、どこかにいいマンション買えばいいじゃない。あ、一千万じゃ買えないか。でも、新しい会社で格安のいい物件紹介してもらって、そこに住めば？ こんな田舎じみた古くさいアパートじゃなくて。

間

弘毅 となりのケアハウスひまわり。手狭になったんで拡張したいんだって。涉のおやしさんから話があつて。ここ、元々、うちの土地だったけど、今はあの人のもんだから。

茂雄 聞いてない、そんな話。

弘毅 僕も今日聞いたところ。

太一 やだ、そんなことになってるの？ そうだ。ねえ、私とこの人と、平谷くんの保険とで、自分の部屋を買い取ったらなんとかならない？

弘毅 築30年のアパート買ってどうするの？ 無理しないでいいよ。それに、太一と茂雄ちゃんが死んだらどうなるの？ 誰のものになるの？

太一 それは……

弘毅 僕が死んだら、僕のは僕の姉貴、涉の母親のもの、姉貴が死んだら涉のもの。どうせそうなるなら、今そうなってもいいんじゃないかと思ってるさ。ちよつと早めの終活みたいなものだから。

茂雄 弘毅がそれでいいなら、そうすればいいと思う。

太一 ちよつとあんた……

茂雄 いつ頃の予定？

弘毅 来年の春には始めたいって。

太一 じゃあ、わかった。でも、ここ出てつても、緊急連絡先はそのまましておくから。

弘毅 遠くにいるのに意味ないじゃん。いいよ消して、僕も消すから。がんばって、お母さんの介護。

太一 ……言われなくてもやるわよ。

太一、出て行く。

弘毅 茂雄ちゃんも。どうぞ。

茂雄 気が変わった。千葉まで通う。

弘毅 無理しちゃダメだって。もう若くないんだから、

茂雄 平谷くんの一週忌が終わるまではここにいます。

弘毅 パートナーだから？

茂雄 うん。

弘毅 それさ、ほんとなの？ 平谷くん、誰でもよかったんじゃないの？

茂雄 誰でもってどういうこと？

弘毅 だったら、僕や太一にプロポーズしたりする？ もし、僕がOKって言ったら、僕が平

谷くんのパートナーになってたわけだよ。

茂雄 それはそうだけど。

弘毅 誰でもよかったんだよ。パートナーになってくれる人なら。保険金受け取ってくれる人なら。何か残したかったんだよ。誰かに自分のしたこと覚えておいて欲しかったんだよ。さびしくなったんだよ。僕たち一緒に住んでいたのに。友達だと思ってたのに。友達じゃだめなんだってことなんだよ。こんなアパートがあったって、何にもならないってことなんだよ。

間

弘毅 だから、解散。

茂雄 弘毅……

弘毅 出てくとき電気消してって。

弘毅、出て行く。

茂雄、一人残っている。

第五場 冬

十二月中旬の夕方。

メゾンラセゾンの庭。

弘毅が杖をついてやってくる。

老け込んだ印象。

ゆっくりと椅子に座って目の前の樹を見ている。

渉がやってくる。

弘毅 あ、渉、どうしたの？

渉 倒れたって連絡もらって。だいじょうぶなの？

弘毅 平気、平気。ちよっと転んだだけだから。

渉 でも杖ついてる。

弘毅 なくても全然平気。杖が必要になったときのシミュレーションしてたの。

弘毅 杖なしで歩いてみせる。

渉 ほんとに？

弘毅 うん。それにね、今日はちよつといいことがあつて。

渉 何？

弘毅 ケアマナージャーの試験に合格しました。

渉 おめでどう！

弘毅 これでまたひとつ目標達成。

渉 次は何？

弘毅 十キロ痩せることかな？

渉 それ、そろそろ真剣に取り組んだ方がいいと思うよ。

弘毅 わかっている。わざわざ来てもらって悪かったね。

渉 それで、こないだ話した、僕がヒロちゃんの養子になるって話。どう？ 考えてくれた？

弘毅 それならもういいから。

渉 でも、このままじゃ親父にいいようにされちゃうよ。

弘毅 勝手に養子縁組したら、それこそ何言われるかわからないじゃない。

渉 そうだけど、今よりよくない？ 親父むちゃなこと言ってるんでしょ？ ケアハウスひまわり、退職させるとか。ゲイの介護士なんていらなかつた。

弘毅 だから、とつたのケアマネの資格。ケアマネ人不足だし、もしクビになつたとしても、よそでやっつけていけるし。

渉 親父、僕がゲイになつたのはヒロちゃんのせいだつて思いこんでるから。なつたんじやなくて、元からそうだつて言ってるのに。

弘毅 とにかく、養子縁組の話はなし。

渉 本当にいいの？

弘毅 うん、ありがとうね。

渉 それでちよつと話があつて。

弘毅 なに？

渉 いいや。じゃあ、お酒買ってくるから。合格祝い。

弘毅 ノンアルにして。

渉 了解。

渉、出て行く。

弘毅、しばらく立っているが部屋に向かって歩き出す。

剛がやってくる。

剛 ごめんください。

弘毅 平谷さん。今日は何ですか？

剛 田口さんから聞きました。ここ、なくなるって。ほんとですか？

弘毅 ええ、まだ先なんですけどね。ゆくゆくは。

剛 賢の部屋、そのままにしてしまってもうしわけないです。あの、家賃、お支払いします。
弘毅 いいんですよ。

剛 でも、いろいろ大変なんじゃないですか？ 誰もいなくなっちゃってしまっ

弘毅 あ、他に仕事してるんで大丈夫です。どうぞご心配なく。

剛 そうですか。

剛、腰をおろす。

弘毅 あの……？

剛 仲が悪かったんです。

弘毅 は？

剛 賢と私です。聞いてませんか？

弘毅 ええ。

剛 話すこともないってことですかね。ずっとうらんでたんですよ。賢のこと。

弘毅 うらんでた？

剛 子どもの頃はごく普通の兄弟だったんです。それが、賢が先に結婚して、子どもでき
て、そのあとで自分はゲイだって言って離婚して。私はこのトシまで独身なんです。賢
が家を出てからずっと、親せきにも近所からも言われて、平谷さんとこの剛ちゃん
はオカマなんじゃないのって。だから、賢にカミングアウトですか、されたときには、頭
にきてしまって。私以上に両親が怒って、それでも私はなだめることはしませんでした。
それでずっと疎遠になって。そのままに。

弘毅 そうだったんですか。

剛 もっと腹が立ったのは、賢がゲイだってわかって、私のうわさがなくなったわけじゃな
いんです。二人ともなのか、やっぱりって。許せないと思ってました。だから、ずっと
会うこともなくて、死んだって連絡をもらったときも。やれやれと思っただけです。ほっ
としたんです。ゲイばかりが住んでるアパートに住んでるって、なんですかそれ。東京
で楽しくお気楽にやってるいい身分だなんて思ってたんです。すみません。

弘毅 いえ、いいですよ。

剛 でも、こちらに何度かお邪魔するうちに、そういうことじゃないんだなって思いました。
もっと話しておけばよかった。

弘毅 賢さんも同じ気持ちなんじゃないですか。

剛 そうですかね。

弘毅 そうですよ。

剛 すみません、こんなことお話しして。誰にも話したことなくて。誰もいないんですよ、
こんな話する相手。賢にはいたんですよ、みなさんが。またうかがってもいいですか。
弘毅 もちろん。

剛 じゃあ、また。ちょっと早いですけど、よいお年を。

弘毅 よいお年を。

剛、出て行く。

風が吹いて樹を揺らす。
裕也がやってくる。

弘毅 誰？

裕也 あの、ここメゾンラセゾンですよ。

弘毅 そうですけど何か？

裕也 部屋の内見させてもらっていいですか？

弘毅 金井不動産から見えたんですね。もう募集はしてないんですよ。

裕也 でも、見たいんです。

弘毅 お帰りください。

裕也 あの、うそでした。清水さんから聞いて。同じ職場で。

弘毅 太一の？

裕也 清水さん、今は新潟店ですけど、僕は新宿で。こういうアパートがあるから住んでみないかって。

弘毅 それやめてほしいって伝えただけ。

裕也 時間があつたら行ってみなさいって言われたんで来ました。

弘毅 お断りします。

裕也 ええ！

弘毅 ええじゃなくて。いいから帰って。

裕也 せっかく来たんでゆつくりしていいですか？

弘毅 あのね……

裕也 亡くなった人の部屋、誰が見てもいいように開けてあるって。お邪魔してもいいですか？

弘毅 それもやめたの。

裕也 開けてください。

弘毅 ……

裕也 あ、溝口裕也ついています。二十三歳。職場ではカミングアウトしてます。

弘毅 それは素敵。

裕也 清水さんからこの話きいたんですけど、ちょっとわからないことがあつて。

弘毅 何？

裕也 なんで始めたんですか？ ゲイばかりが住むアパート。

弘毅 聞いてないの、太一から？

裕也 はい。

弘毅 そっか、太一も知らないのか。

裕也 教えてください。

弘毅 長い話になるけどいい？ 年寄りの昔話だよ。

裕也 平気です。

間

弘毅

このアパート、僕は父親から相続したんだよね。若い頃ずっとふらふらしてたから、せめてもってかんにで、僕に残してくれた。本当の両親じゃないんだ。男の子がほしくて養子にとったんだって。孫の顔が見たかったんじゃない。だからゲイだってカミングアウトしたら大騒ぎ、血がながってないってこともそのとき初めて聞かされて。威張ってカミングアウトしたら、やられたってかんに。そんなことがあったから、両親が事故で死んじゃったとき、もう関係ないってことにしようかと思っただよね。でも、やめたんだ。僕のために残してくれたものなんだから大事にしようって。それで、ずっと大いになって。90年代。思いついたんだよね。そういうのあつたら楽しいなって。いやなこといっぱいあつたから。男二人で部屋借りに行ったら、ひどい対応されたり、カミングアウトしたら「エイズなの？」って言われるような時代。だから、いやな思いをしなくていい場所になるといいなって。知り合いのくちこみで入居者集めてさ。一人はそれのときつきあつた相手なんだけど。みんな、ただ住んでるだけなのに、毎日が楽しかった。旅行にも行つたし、この庭でいろんなことして遊んだ。おかしなこといっぱいあつて。ゲイの入居者って決めてるのに、どういうわけか女の子が来ちゃったり。付き合ってたあいてに捨てられた子が、手切れ金代わりの家賃半年分で転がり込んだり。家族とは縁遠い人が多くって、僕もそうだけど、ここにいとなんだかうれしくて。ほっとして。家族じゃないけど、家族みたいなものがここにはあつただよね。

問

弘毅　なが！　おしまい。

裕也　もつたいないな。おもしろいじゃないですか、ゲイばかりのアパート。

弘毅　おもしろいか……

裕也　あの、引っ越してきていいですか？　ここに住んでみたいです。パートナーと二人で部屋借りるの大変で。あ、別々でいいんです。その方がかえっていいのかもしれないし。だめですか？

弘毅　……。

裕也　だめですか？

弘毅　ごめんね。それじゃ。

弘毅、出て行く。

裕也、しばらく立っているが退場する。

第六場　春・エピローグ

翌年の4月。
庭。

太一がサングラスと日傘で椅子にすわっている。
弘毅がやってくる。

弘毅　太一？

太一 暑いわね。

弘毅 それ（サングラスと日傘）いる？

太一 春の紫外線はばかにできないんだって。でも、いい天気でよかったわね、平谷くんの一週忌のパーティ。パーティは変か？

弘毅 変じゃない。みんなで楽しくあつまるから。理彦も来るって。

太一 アメリカから？

弘毅 渉が迎えに行ってる。

問

弘毅 元気？

太一 まあね。

弘毅 お母さんは？

太一 もう聞いて。ようやく施設に入ったのよ。面倒見てた叔母と一緒に。

弘毅 一緒に？

太一 元々老々介護だったんだけど、たおれちゃって。誰が金出すんだって話になって、私が出すわよ、二人分って言ったら、あっさり解決。

弘毅 大変じゃないの？

太一 まあ覚悟はしてたから。二人分は予想外だったけど。あんたケアマネージャー合格したんでしょ。ちよつと相談のつて。

弘毅 うん。

茂雄と剛がやってくる。

弘毅 平谷さん。

剛 今日は、どうもありがとうございます。いろいろご面倒をおかけして。

弘毅 勝手にやってるんで、気にしないでください。天気もいいし、予定より大勢になったんで、ここでやることにしました。

剛 賢の同僚の先生たちも見えるそうですね。

弘毅 賢さんの友達も大勢。

剛 よろしくお願ひします。

弘毅 はい。（茂雄に）ひさしぶり。

茂雄 うん。元気？

弘毅 おかげさまで。

太一 何よそゆきの会話してんのよ。それより、翔太くん、どうなった？

弘毅 翔太くん？

太一 平谷くんの子ども。二人して会いに行っただんでしょ？

弘毅 なんで？

剛 相続放棄の取り消しを頼みに。

弘毅 取り消して、できるの？

茂雄 できる。本人の了解なしにお母さんが手続きしたんだって。それに間違った情報を元に放棄したってことだから。債務がないのにあると思つて。

剛 田口さんに言われて、私もぜひそうしたいと思ひました。賢のためにも。

茂雄 お兄さんに連絡とってもらつて、会うことになった。名古屋駅地下街の喫茶店。

茂雄と剛は正面を向いて椅子に座る。
手前（客席側）に翔太がいる。

太一 どんな子？ 平谷くんに似てる？

茂雄 おもかげはあるけど、母親似かな？ 大学三年生。背が高く細身。髪は今風な短めのツーブロック。就職活動始めてるんだって。

剛 （紹介する）お父さんのパートナーの田口茂雄さん。

太一 言つたんだ？

剛 （太一に）はい。全部話そうと思つたんで。

弘毅 反応は？

茂雄 おどろいてた。

剛 （翔太に）相続放棄、取り消してくれないかな？ お父さんに債務はないし、相続税もかからない。そうしたら、こう言つた。「いいんですか、僕がもらつちやつて？」

茂雄 うん。僕は相続できないんだ。パートナーシップ宣誓してるんだけどね。

剛 「なんだかすみません。」

茂雄 あやまることない。

剛 そうしたらこう言つた。「よかったです。父は一人じゃなかつたんですね。」

茂雄 もちろん。

剛 「それじゃあ、取り消します。」

茂雄 ありがとうございます。

剛 その後、名古屋にいる田口さんの知り合いの弁護士さんに手続きをお願いしました。家庭裁判所から連絡があつて、無事受理されたそうです。

太一 よかつた。

弘毅 平谷くんの遺産は、茂雄ちゃんと翔太くんで半分ずつか。

茂雄 それが違うんだよね。保険会社に連絡したら、虚偽の申告をされているので支払えないって。

弘毅 今になつてそんなこと言うの？

茂雄 だったら、元の受け取り人、翔太くんに戻せないかかっていたらそれもできないって。

太一 どういうこと？

剛 弁護士さんに頼んで交渉中です。納得できませんからね。

裕也がやつてくる。

裕也 どうも。

太一 溝口くん、ひさしぶり。元気にしてる？

裕也 はい。清水さん、新潟からですか？

太一 うん。明日、新宿に顔出すから。

裕也 待ってます。（剛を見て）平谷先生？

剛 は？

裕也 あ、すみません。人違いでした。でも、よく似てる。

弘毅 人違いって、誰と間違えたの？

裕也 高校の担任の先生です。僕がまだカミングアウトしてない頃、悩んでたら、相談に乗っ

てくれて。その時、言われたんです。好きなように生きていいんだよ。自分のやりかた
で。きみはひとりじゃないって。それで、僕、がんばれたんです。

問

剛 賢がですか？

裕也 はい。平谷賢先生です。

剛 私の弟です。

裕也 よろしくお伝え下さい。

剛 今日は賢の一周忌のパーティなんですよ。

裕也 そうだったんですか。

茂雄 平谷くん、そんなことしてたんだ。

太一 やるわね。

裕也 平谷先生、ここに住んでたんですね。

弘毅 うん、住んでた。

裕也 やっぱり引っ越してきちやだめですか？ パートナーと別れて今一人なんですけど。

弘毅 ごめんね、それはできない。

裕也 お願いします。

弘毅 だめなの。ここシェルターになるから。

太一 シェルター？

弘毅 虐待されたり、いろんな事情で自立できないLGBTQのためのシェルター。渉が区役
所に相談してくれて、となりの拡張に応じるより、そっちの方がいいかなって。僕は、
引き続き、管理人としてここに住むことになったから。

太一 建物もそのまま？

弘毅 ちよっと改築はするんだけどね。だから、メゾンラセゾンはずっとある。

問

太一 悪くないかも。シェルター。

茂雄 たしかに。

太一 少しのんびりしない？ まだ時間あるわよね。ひと休みしましょう。よかったわ、いい
天気で。

茂雄 あんた何もしてないじゃない。

風が吹いて樹を揺らす。

裕也 この樹なんの樹ですか？

太一 さあ、前からずっと気になってるんだけど。

裕也、スマホで調べようとする。

弘毅 ああ、だめ。調べないで。謎のままでもいいから。

太一 花が咲くわけじゃないし、葉っぱが紅葉するわけでもないし。特徴がないっていうか、役に立たないっていうか。

弘毅 たしかに変だよな。子供の頃からずっと見てるけど、ずっとこのまんまだった気がする。あれ、少しは大きくなってるのかな？

太一 ねえ、この木の目的は何なわけ？

茂雄 何よ、目的って。

太一 だって、花も咲かない、実もつけないって何のために立ってるんのよ？

裕也 雄の木なんじゃないですか？ ほら、木って、雄の木と雌の木ってあるから。

太一 でも、それだって、花咲くんじゃないの？ 雄なりに。

茂雄 咲かないのよ、あんたと一緒に。

太一 私はちゃんと咲いてます。

茂雄 ただ枯れないでいるってかんじよね。

太一 ほっといてちょうだい。

弘毅 この樹はずっとここにおいて、全部見てるんだね。

剛 そして、私たちよりずっと長く生き続ける。

太一 くやしいから、切り倒してもらおう？

茂雄 やめなさいって。

弘毅 ねえ、しりとりしない？ 昔やったみたいに。

剛 しりとりですか？

弘毅 でも、木の名前しか言っちゃいけないの。

裕也 木の名前って……

茂雄 いいよ、やってみよう。

しりとりが始まる。

弘毅 じゃあね、モミ。

剛 ミカン。

太一 ブーツ。

剛 ミのつく木なんてありますか？

裕也 ミカンのキ。

剛 そういうのありなんですか？

弘毅 あり、あり。

太一 じゃあ、やりなおし。

剛 ミカンのキ。

茂雄 キリ。

太一 リラ。

裕也 ライラック。

太一 リラとライラックは同じよ。

裕也 ライラック。

弘毅 クリ。

剛 リンゴのキ。

茂雄 キンカン。あ……

太一 このしりとりには無理があるわ。もうやめない？

弘毅 じゃ、しりとりじゃなくて、古今東西、木の名前？

茂雄 そうね。それならいいかも。

弘毅 じゃあ、行くよ。古今東西、木の名前。シラカバ。

剛 フジ。

茂雄 マツ。

太一 スギ。

裕也 ナラ。

弘毅 ポプラ。

剛 イチョウ。

茂雄 ブナ。

太一 シイノキ。

裕也 カエデ。

弘毅 サクラ。

剛 八重桜。

茂雄 枝垂れ桜。

太一 ケヤキ。

裕也 アスナロ。

弘毅 (遠くを見て) あ、渉！

みんな弘毅が見ている方を見る。

太一 やだ、となりにいるの理彦？

茂雄 すごい、育ってる。

弘毅 おかえり！

一同、やってくる渉と理彦を見ている。

